

## 男性性・女性性と友人への自己開示の深さの関連

新井 時 生

本研究の目的は、男性性・女性性という性格特性と自己開示の深さの関連について検討することであった。調査対象者は、110名（男性48名、女性62名、平均年齢20.79歳、 $SD=2.93$ ）であった。男性性・女性性を独立変数、レベルⅠからレベルⅣの4つの深さに分類されている自己開示の深さを従属変数とする2要因分散分析を、男女別に同性の友人への自己開示と異性の友人への自己開示のそれぞれについて行った。その結果、男性では異性の友人への自己開示の深さレベルⅡ（困難な経験）とレベルⅢ（決定的ではない欠点や弱点）において、男性性が高いほど自己開示をしていた。女性では、同性の友人への自己開示の深さレベルⅡ、異性の友人への自己開示の深さレベルⅡにおいて、男性性が高いほど自己開示をしていた。このことから、男性においても女性においても、男性性が自己開示の深さに影響していること、女性性は自己開示の深さと関連がないことが明らかになった。

---

## 心理的負債感と被援助志向性、援助要請スタイルの関連

久野 晨 人

本研究は、援助要請行動にかかわる要因を明らかにするため、性差の観点も含め、心理的負債感、被援助志向性、援助要請スタイルのそれぞれの関連を検討することを目的とした。大学生を対象にオンラインによる質問紙調査を行った結果、心理的負債感の下位因子が、男女ともに、被援助志向性の下位因子と負の関連、援助要請自立型と正の関連が見られ、女性のみ、援助要請過剰型と負の関連、援助要請回避型と正の関連が見られた。また被援助志向性の下位因子が、男女ともに、援助要請過剰型と正の関連、援助要請回避型と負の関連が見られ、女性のみ、援助要請自立型と負の関連が見られた。これらの結果より、心的負債感が被援助志向性を抑制する要因であること、また心理的負債感と被援助志向性が援助要請行動のスタイルに影響を与えていることが示唆された。

---

## WEB会議システムが集団の意思決定過程に及ぼす影響

—公的自己意識に着目して—

下川 慶 悟

本研究では、公的自己意識に着目して、WEB会議システムが集団の意思決定過程に及ぼす影響について検討することを目的とした。WEB会議システムの特徴として、セルフビュー機能で自分のカメラ映像を確認できる点、会議の参加者間でカメラをオンにしている人、していない人の混在が可能なのが上げられる。そこで、本実験では、2者で集団を構成し、カメラを2者ともオンにしている群、オフにしている群、一方がオン、もう一方はオフにしている群に分け、それぞれの群の議論前後の情報量を測定した。分散分析の結果、公的自己意識の主効果が見られた一方でWEB会議システムにおけるコミュニケーション状況による効果は主効果、相互作用ともに見られなかった。本研究の結果より、カメラ映像のオン、オフにより、情報共有行動に差が生じないため、議論のメンバーそれぞれが参加しやすい形での議論で十分であることが示唆された。

## 商品の周辺情報を用いた広告コピーが商品魅力度と与える影響の検討

落合達哉

私たちは商品を購入する際、もちろん商品自体の性能や品質のような製品特徴に関する情報（中心情報）を考慮して意思決定を行うが、製品特徴以外の情報（周辺情報）も意思決定に大きな影響を与えている。本研究では、広告の作成において効果的であるされている3つの効果に注目し、これらの効果に基づく周辺情報を用いた広告コピーが商品魅力度と与える影響を検討した。大学生・大学院生69名（男性57名、女性12名、 $M_{age}=21.58$ 歳）に対してオンライン実験を行い、各効果に基づいた広告画像刺激を呈示して商品魅力度の評価とTen Item Personality Inventory (TIPI-J)の回答を求めた。各効果の商品魅力度について1要因被験者内分散分析を行った結果、各効果やその組み合わせによって商品魅力度が異なり、仮説は一部支持された。各効果の商品魅力度とTIPI-Jの各尺度得点の相関係数を算出した結果、一部において有意な相関が見られた。効果によって商品魅力度と与える影響が異なることが示唆された。

---

## 出会い方の違いによる浮気行為への予測対処行動の違い

—マッチングアプリとリアルでの出会いの比較—

大嶽百萌

本研究の目的は、マッチングアプリの利用が、恋人との葛藤対処時の行動選択にどのような影響を及ぼすのかを検討することであった。マッチングアプリの利用経験は、その人の関係流動性とコミットメントに影響を及ぼし、葛藤対処時の行動選択に影響を与えると予測した。架空の浮気場面として恋人と第三者が手を繋いで歩いている場面を設定し、日本語版投資モデル尺度、関係流動性尺度、架空の浮気場面への予測行動尺度を用いて、現在恋愛関係にある未婚の18歳～29歳の男女129名に質問紙調査を行った。分析の結果、マッチングアプリの利用経験者は、非利用経験者よりもコミットメントにおける関係満足度や投資量が低くなりやすく、関係流動性における関係形成・解消の自由度が低くなりやすいことが示された。この結果から、マッチングアプリの利用経験の有無は、恋愛関係における関係性や葛藤対処時の行動選択に影響する可能性が示唆された。

---

## 大学生の運動系部活動およびサークル活動への適応感

—内発的動機づけとソーシャルスキルの観点から—

大塚萌恵

本研究では、運動系部活動・サークル活動における適応感に、内発的動機づけとソーシャルスキルが与える影響について検討した。先行研究より、内発的動機づけおよびソーシャルスキルがそれぞれ適応感に正の相関があると分かっている。そこで、内発的動機づけの高低に関わらず、ソーシャルスキルが高ければ適応感が高まるかを検討した。そのため、運動系部活動・サークルに所属するもしくはしていた大学生・大学院生を対象にオンライン質問紙調査を行った。そして、内発的動機づけとソーシャルスキルを独立変数、適応感を従属変数として分散分析を行った。結果、内発的動機づけおよびソーシャルスキルと適応感のそれぞれに正の相関および主効果が見られた。これは、先行研究の結果と一致した。一方、適応感に対する内発的動機づけとソーシャルスキルの相互作用は見られなかった。この結果に対し、調査参加者の属性の要因の影響を受けているという考察になった。

## 表情認知による情動伝染の強さはパーソナリティによって異なるか

乙 幡 樹 生

他人の表情を見るとその感情価と同方向に自分の感情が変化することを、表情を通じた情動伝染という。本研究は、感情が表情を通じた情動伝染によって変化する程度に影響する個人差について検討した。大学生112名（男性55名、女性56名、その他1名、 $M_{age}=20.87$ ）に対しオンライン実験を行い、神経症傾向、外向性、他者への意識、ポジティブ・ネガティブ感情を測定後、ポジティブ表情またはネガティブ表情を提示する群に分け、その後再度ポジティブ・ネガティブ感情を測定した。条件ごとに表情提示前後の感情について対応のあるt検定を行った結果、条件の感情価と同方向に感情が変化する傾向は見られなかった。条件ごとに感情の変化量を基準変数とする重回帰分析を行った結果、ポジティブ表情提示群における神経症傾向の負の効果を除き、主効果・交互作用は見られなかった。課題の認知負荷の高さが情動伝染を抑制した可能性が示唆された。

---

## 地震における防災教育のフレーミング効果がリスク認知および防災意識に与える影響

尾 上 航 大

本研究では、大学生の地震に対するリスク認知および防災意識を高めるための防災教育におけるリスクメッセージの在り方を検討した。先行研究などから、ネガティブなフレーミングや強調的な文言（高リスク条件）を使用することで、防災教育の効果を高めることが出来ると推測し調査を進めた。結果として、地震における防災教育の教材について、フレーミングおよびリスク条件の効果は有意であり、ネガティブなフレーミングや強調的な文言を使用することが、受け手のリスク認知、防災意識および防災行動意図を高めることが出来るという結果が得られた。しかし、リスク認知において強調的な文言の有無による効果の有意差は見られなかった。本研究結果から、脅威が強いメッセージが防災教育の効果を高めることが示唆されたが、正常性バイアスや脅威への順応などの懸念点も考えられるため、メッセージを呈示する環境やタイミングについても検討する必要があると言える。

---

## 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマと曖昧さへの態度の関連

—愛着スタイルの効果を踏まえて—

寛 巴 菜

青年期における友人関係についてはこれまで数多くの研究が蓄積されており、他者との適度な心理的距離を模索する中で起こる葛藤である山アラシ・ジレンマと、他の個人内要因との関連についても研究が進められている。その中でも本研究では山アラシ・ジレンマの起こる要因や過程について検討するため、先行研究よりそれぞれの変数同士の関連が予測された愛着スタイルと曖昧さへの態度について同時に着目し、それらの関連と予測された媒介モデルを検討した。その結果、曖昧さに対する不安などの否定的態度と愛着スタイルにおける見捨てられ不安から山アラシ・ジレンマに対する正の効果や、見捨てられ不安から曖昧さへの否定的態度への正の効果などが示唆された。さらに、仮説モデルについて修正をふまえて検討したところ、見捨てられ不安から対自的要因によるジレンマへの正の効果において、曖昧さへの否定的態度が媒介効果を持つことが示唆された。

## 賞賛獲得欲求及び拒否回避欲求と対人ストレスイベントとの関連

神谷光希

本研究では、対人ストレスイベントの中でも対人摩擦に着目し、承認欲求を形成する賞賛獲得欲求・拒否回避欲求という2種類の欲求の高さによって、ストレスの感じやすさとその原因帰属がどのように異なるかを検討した。仮説は以下の3つである。賞賛獲得欲求が高い人は、対人ストレス場面での外的帰属傾向が高い。拒否回避欲求が高い人は、対人ストレス場面での内的帰属傾向が高い。拒否回避欲求が高い人は、対人摩擦でのストレスを感じやすい。オンラインで質問紙調査を実施し、重回帰分析をしたところ以下の結果が得られた。拒否回避欲求が高い女性は、対人ストレス場面での内的帰属傾向が高かった。拒否回避欲求が高い人は、対人摩擦のストレス度、頻度、インパクトを感じやすかった。賞賛獲得欲求は男性の方が高く、拒否回避欲求は女性の方が高かった。今後の課題として、バイアスの考慮、対人摩擦に関連する他の要因の検討、年齢や性別との関連が挙げられた。

---

## 怒り表出と自己愛及び愛着の関連の検討

島村崇弘

本研究は怒り表出・抑制・主張性について誇大型と過敏型の2種類の自己愛および安定・拒絶・とらわれ・恐れ  
の愛着の4類型の関係性を検討することを目的とした。インターネット調査の回答者106名を対象とし調査を行なった。相関分析の結果、過敏型自己愛ととらわれ型及び恐れ型には強い正の相関が見られた。また重回帰分析の結果、「怒り表出」には「自己顕示抑制」「潜在的特権意識」が影響しており、「怒り抑制」には「承認・賞賛過敏性」が影響しており、怒り主張性には「NPI総得点」が影響していた。さらに分散分析の結果、「怒り表出」と「怒り主張性」では自己愛の主効果のみが有意であり、「怒り抑制」では有意な効果は確認されなかった。自己愛の主効果について、「怒り表出」では誇大H過敏L群が他群に比べて有意に低く、「怒り主張性」では誇大L過敏H群が誇大H過敏L群に比べて有意に低い結果となった。

---

## 中学生の居場所感と学校適応感の関連 —対面とインターネット上の友人関係に着目して—

武内菜々実

本研究は、中学生を対象に、対面で友人と交流している場面、インターネット上で友人と交流している場面の居場所感と、学校適応感の関連を明らかにすることを目的とした。インターネット上で交流する友人は、対面でも交流がある友人と、インターネット上のみで交流がある友人に分けて検討した。調査対象者は中学生277名であり、そのうち、インターネット上で友人と交流している生徒は175名、インターネット上のみで交流する友人がいる生徒は72名であった。分析の結果、対面で友人と交流する場面の居場所感が高いほど学校適応感が高いことが明らかになった。一方、インターネット上での居場所感と学校適応感との関連は見られなかった。また、対面の友人とインターネット上のみで友人と交流する場面の居場所感の差と学校適応感には、弱い正の相関が見られ、個人内での居場所感の差に着目しながら支援のあり方を検討することの必要性が示された。

## 採用面接場面のメンタル・シミュレーションが被面接者の面接不安低減に与える影響

武田 溪 登

本研究では、採用面接という不安を感じる場面の事前のメンタル・シミュレーションが自己呈示効力感を高め、面接不安を低減させるという仮説の検証を行った。研究1では、大学生103名を対象に、日本版面接不安尺度の作成を目的として調査を実施した。確認的因子分析では十分な妥当性を確認できなかったため、探索的因子分析を実施した結果、「対人パフォーマンス不安」「コミュニケーション不安」「行動不安」「対人外見不安」の4因子（計22項目）から構成されることが示され、また $\alpha$ 係数の算出や他尺度との相関を見ることで信頼性と妥当性を検討した。研究2では、大学生24名を対象に模擬面接を実施し、メンタル・シミュレーションと自己呈示効力感、面接不安との関連を検討した。実験の結果、仮説は支持されなかったが、同時に面接場面のメンタル・シミュレーションまたは簡易瞑想法が自己呈示効力感を高め、面接不安を低減させる可能性を示唆する形となった。

---

## 被評価者の特性が人事評価の知覚およびその後のワーク・モチベーションに及ぼす影響について

坪内 駿 弥

自己肯定感の高低によって会社員の人事評価への感じ方や評価を受けた後のワーク・モチベーションに相違があるか検討した。現在正社員として企業に勤める3年以上の社会人を対象に調査を行い、71件の回答を得た。そして、参加者を自己肯定感の高低と呈示した仮想の人事評価の高低の2×2群に分けた上で、評価の感じ方に関する質問項目への回答とワーク・モチベーションを測定する尺度の得点について二要因分散分析を行った。さらに交互作用が見られた項目では単純主効果検定を実施した。その結果、特に自己肯定感高群においては成功を内的要因に、失敗を外的要因に帰属しやすく、高い評価を自ら得たものとして妥当だと感じ、低い評価を自分以外の外的原因によって低められたものとして妥当でないと考える傾向の存在が示唆された。また、自己肯定感が低い人は例え高評価を受けてもその後のパフォーマンス向上に自信を持ちにくい可能性が僅かに示された。

---

## 大学生における日常の情動的摂食がもたらす満足・後悔の検討

長橋 宙 夢

ネガティブな感情に反応して生じる情動的摂食は以前から知られていたが、近年注目されているポジティブな感情に対する情動的摂食との相違は明らかにされていない。そこで本研究は、ポジティブ・ネガティブな各情動的摂食による満足・後悔と抑制的摂食傾向と情動的摂食傾向の関連を検討した。その結果、ポジティブな情動的摂食は高い満足をもたらし、ネガティブな情動的摂食は満足と後悔を同程度にもたらしていた。また抑制的摂食傾向の高い者はネガティブな情動的摂食での後悔が大きいことが示された。情動的摂食傾向による差は食後の後悔にのみにあらわれ、仮説と反する結果となった。この結果からポジティブな感情に対する情動的摂食を測定する方法論上の問題が示唆された。今後は満足や後悔に対する食事内容や時間経過による影響を検討することで食行動異常や摂食障害のメカニズムを明らかにする一助となるだろう。



## 社会的比較志向性及び自己価値の随伴性が抑うつ傾向に与える影響

堀 勝 太

本研究では、社会的比較志向性から抑うつ傾向の影響を、自尊感情の随伴性の程度が調整する可能性を検討した。自己価値の随伴性は、自分の価値を内的もしくは外的な部分に随伴している程度を表す概念であり、内的な随伴性として本来感尺度を、外的な随伴性として自己価値の随伴性尺度の一部を使用した。結果として、外的な随伴性尺度が高い場合のみ、社会的比較志向性と抑うつ傾向の影響を強める調整変数として役割を果たすという示唆が得られた。なお、本来感尺度は調整変数としての役割は確認されなかったものの、本来感尺度自体が抑うつ傾向を抑制する要因であることが明らかになった。これらを踏まえ、本研究では自尊感情の外的な随伴性を高めることが、社会的比較志向性とそれに伴う抑うつ傾向を増長させる可能性を示した点において、新たな知見をもたらすことができたといえる。

---

## 楽観性およびメタ認知が目標対処方略を介して幸福感に与える影響

村 雲 奏 太

本研究は、困難な目標への対処方略に影響を与える要因として、楽観性とメタ認知を取り上げ、これらが困難な目標への対処方略を媒介として主観的幸福感に与える影響を検討した。楽観性は目標継続、目標断念と関連し、メタ認知は目標の調整と関連し、それぞれが主観的幸福感を促進または抑制させると予測した。結果として、楽観性とメタ認知の目標対処方略を媒介とした主観的幸福感への影響は見られなかったが、楽観性は目標継続と目標断念、メタ認知のコントロールとメタ認知的知識は目標の調整に影響を及ぼすことが示された。また、楽観性が主観的幸福感に最も強い影響を及ぼしていた。ここから、楽観性とメタ認知が目標対処方略を規定する要因であることが示唆され、大学生の目標に対する粘り強い取り組みや柔軟な調整の重要性が明らかになった。

---

## 関係効力性認知が個人の対人トラブル経験頻度に与える影響

山 本 万 葉

本研究は、関係効力性を高く感じる友人数、すなわち関係効力性認知の高低が個人の対人トラブル経験頻度にどのような影響を与えるのかについて検討を行うことを目的として行った。関係効力性とは、二者間で共有された効力期待を指し、自分たちの関係を脅かす問題の予防や解決に向けて二者双方の資源を協調的ないしは統合的に活用できるというものである。分散分析の結果、対人ストレスイベントのうち「対人摩擦」においては、関係効力性を高く感じる友人数が3人以上の群よりも1人の群の方がトラブルイベント経験頻度が高いことが示された。また、階層的重回帰分析の結果、日常生活におけるトラブル経験頻度は、関係効力性認知と対人トラブル経験頻度に与える影響を部分的に調整する可能性が示唆された。

## 居住地域が子どもの学習への自律的動機づけに及ぼす影響 —親の教育アスピレーションの媒介効果に着目して—

渡辺 愛 桜

本研究は、居住地域が子の自律的動機づけに与える直接効果および親の教育アスピレーションを介して与える間接効果について、大学（現在）および小中高（回顧報告）の学校段階ごとに検討した。大学生141名に調査を実施し、111名（うち男性39名）を分析対象とした。対応のないt検定の結果、中高大では地方で教育アスピレーションが高いこと、中学では地方で自律的動機づけが低いことが示された。相関分析の結果、大学を除き、教育アスピレーションが高いほど自律的動機づけの因子のうち外的調整が高まることが示された。媒介分析の結果、地方に住むことは複数の学校段階・動機づけの組み合わせにおいて負の直接効果と正の間接効果を持つことが示された。本研究の結果、地方居住者では親のアスピレーションの高さを通じて子の学習動機づけが低くなると同時に、何らかの要因により子の学習動機づけが高くなるという複合的過程の存在が示唆された。

---

## 拡張接触を通じた精神障害者に対するパブリック・スティグマの低減 —潜在的指標を用いた検討—

原 田 慎 也

本研究の目的は、(1) 接触経験の違いにより精神障害者に対する態度が潜在・顕在レベルでどの程度異なるか検討することと、(2) 拡張接触を経験できるシナリオ動画を視聴する場面想定法実験にて、視聴前後での態度変化の程度を検討することである。大学生・大学院生152名が(1)の、そのうちの29名が(2)の分析対象となった。(1)では、参加者は精神障害者との直接／拡張接触経験の違いで3群に分類され、精神疾患に対する潜在・顕在的態度、および知識を測定する課題に取り組んだ。(2)では、参加者はランダムに2群に分類され、それぞれ異なる動画を視聴した後、(1)の態度を測定する課題に取り組んだ。回帰分析の結果から、(1)、(2)ともに、群の違いによる精神障害者に対する潜在・顕在的態度に有意な差は見られなかった。本研究では、実験操作や測定上の限界点がいくつか存在したが、今後、賛否両論ある拡張接触仮説に対し潜在的態度の観点から因果関係に迫る意義を見いだした。

---

## 母子関係における相互的な悩みの自己開示が青年の本来感に及ぼす影響

笠 井 麻 実 子

本研究の目的は、青年期の青年が認知する自分自身の悩みの自己開示と母親の悩みの自己開示の特徴を母子関係における精神的自立の側面から検討するとともに、母子間の悩みに関する自己開示における相互性を検討し、母子それぞれの自己開示が青年の本来感に与える影響を調査することであった。調査協力者231名を対象に調査を実施した。相関分析と重回帰分析の結果、母親の悩みに関する自己開示は青年の悩みに関する自己開示を、青年の悩みに関する自己開示は母親の悩みに関する自己開示を促進し、母子関係における悩みの自己開示の相互性が確認された。また、母親との信頼関係が母子それぞれの悩みの自己開示につながり、青年と母親の悩みの自己開示は部分的に青年の本来感に正の影響を持っていることが示された。

## 親の欲求阻害行動による子どもの抑うつを低減する要因の検討

伊藤 萌里

本研究の目的は親の欲求阻害行動と子どもの抑うつの間で機能する調整変数を検討することであった。高ストレス下でも抑うつが高くない者がもつ特性であるハーディネスの構成要素の1つであるコミットメントに着目し、親の欲求阻害行動と子どもの抑うつの間におけるコミットメントの調整効果を検討した。両親ともに同居している、または両親ともに同居していない大学生・大学院生127名を対象に調査を実施した。階層的重回帰分析の結果、親の欲求阻害行動とコミットメントの交互作用は見られなかったが、母親の有能感阻害行動とコントロール、母親の関係性阻害行動とコントロールの交互作用が見られ、母親の有能感阻害行動と子どもの抑うつの間でコントロールが調整し、抑うつの低さと関連することが示された。一方で、母親の関係性阻害行動と子どもの抑うつの間ではコントロールが調整して抑うつの高さと関連することが示された。

---

## 幼児の情緒・行動の問題と母親の育児不安の関連におけるマインドフルな子育ての調整効果

春日部 好香

本研究の目的は、子どもの情緒・行動の問題と育児不安の関連における、マインドフルな子育ての調整効果について検討することであった。幼稚園及び保育園の3~5歳児クラスに通う子どもを持つ母親1,523名に依頼書を配布し、468名からWeb調査の協力を得た（回収率30.7%）。調査では、育児不安、マインドフルな子育て、子どもの情緒・行動の問題について測定した。相関分析の結果、子どもの情緒・行動の問題と育児不安の間に正の相関が、マインドフルな子育てと育児不安の間に負の相関が見られた。また、階層的重回帰分析の結果、子どもの情緒・行動の問題に正の主効果が、マインドフルな子育てに負の主効果が見られた。マインドフルな子育てと子どもの情緒・行動の問題の交互作用は見られなかった。本研究の結果から、マインドフルな子育てでは、思考や感情を客観的に捉え、それらに巻き込まれない「脱中心化」により、育児不安が軽減されることが示唆された。

---

## 不利益を被る他者の場面に際し生起される怒り感情の検討

—被害者・場面・共感性の効果に焦点を当てて—

川村 麻衣

本研究では、誰かのせいで不利益を被る他者の場面を目の当たりにした者が感じる怒りが、何によるものなのかを検討した。先行研究では、主に被害者の違いによって怒りの程度が変わるといった被害者の効果を主張していたが、本研究では目撃者自身の共感性が高いほど怒り感情も高くなるという共感性の効果、不利益を被る場面が日常的な場面であるほど怒り感情が高くなるという場面の効果を示すことを目指した。結果として、共感性の効果は有意傾向であり、場面の効果に関しては有意な結果が得られた。なお、被害者の効果に関しては、先行研究とは異なり有意な結果が得られなかった。これにより、被害者が誰かという変えようのないものが怒りを決定づけるとした先行研究に対し、本研究ではどれだけ場面を身近に感じられるか・どれだけ共感性が高いかにより、怒りが変動するものであることをある程度示すことができたと言える。



## 両親間の不和が青年の抑うつ傾向に与える影響を抑制する要因の検討 —ネガティブな反すうのコントロール可能性に着目して—

榊原 浩 祐

良好でない夫婦関係は子どもに負の影響を及ぼす。特に大学生において好発しやすいのが抑うつであり、抑うつを抑制する手立てを検討することは喫緊の課題である。本研究では大学生を対象にネガティブな反すうのコントロール可能性に着目し、夫婦関係を良好でないと認識している大学生の抑うつにどのように影響するのかを明らかにすることを目的とした。研究参加登録システムを利用して質問紙調査を行い、大学生153名から有効回答を得られた。本研究の目的を検討するため抑うつを目的変数とする重回帰分析を行った。その結果、夫婦関係の良好さとネガティブな反すうのコントロール可能性はいずれも抑うつに影響を与えることが示されたものの、ネガティブな反すうのコントロール可能性の高低によって夫婦関係に対する認知と抑うつの程度が変動するという結果は得られなかった。

---

## 単語の形容方法と記憶との関連性の検討

史 鵬 凱

本研究は、処理水準説と精緻化説にもとづき、単語に関する形容方法（一般表現、カテゴリー所属、比喩表現）の違いによる単語の記憶への影響を検討することを目的とした。また、単語を読むことに比べて、単語を生成することで生じる単語の記憶が促進される現象について、単語自身でなく、単語に関する情報を生成した場合においても生じるかどうかを検討した。本研究では、日本語の単語30語を用いて、形容方法（一般表現、カテゴリー所属、比喩表現）×課題タイプ（判断、生成）で計6つの課題に分けて、その後の自由再生テストの成績との関連性を検討した。その結果、形容方法による単語の記憶への影響は確認できなかった。一方、単語に関する形容方法を生成する場合は、単語に関する形容方法の適切性を判断する場合よりも、自由再生テストの得点が高いことが確認された。

---

## 視・聴覚間と言語・非言語間の処理資源の一般性と注意の瞬きへの資源理論の適用

杉 山 和 希

人が認知課題を遂行する際に消費される心的エネルギーである処理資源に関するふたつの研究が行われた。第一部では資源理論の内側の問題として、資源が複数種類存在すると説く多重資源理論を、課題の性質と資源の量的側面の観点から、認知・神経科学研究のレビューを通して批判した。実験では多重資源理論に則れば課題干渉の起こりえないふたつの課題（視覚性文字弁別、聴覚性音高弁別）を同時に遂行したが、データの解析結果は顕著な成績低下を示し、資源の未分化性が実証された。第二部では資源理論の外側ないし適用範囲の問題として、注意の瞬き現象への資源理論の適用可能性が検討された。従来の説明モデルを概観し、これらを行動および神経相関データに適うように統合する流動資源モデルを提案した。当モデルは注意の瞬きが初期・高次いずれの処理において起こるメカニズムも説明可能であり、また注意の瞬きの個人差をも包含することのできるモデルである。

## 大学生における依存欲求とソーシャルサポートが孤独感に及ぼす影響

袖山 翔天

本研究では、大学生を対象に情緒的依存欲求、道具的依存欲求からソーシャルサポートを介した孤独感との関連及び居住形態による関連の違いを検討することを目的とした。有効な回答が得られた127名（男性35名、女性90名、回答したくない2名）を対象に、仮説モデルをパス解析によって検証しようと試みた。修正指標及び適合度をもとに修正を繰り返したが、情緒的依存欲求と道具的依存欲求から、ソーシャルサポート及び孤独感への有意なパスは見られず、仮説を支持する結果は得られなかった。また、居住形態による影響の違いについてパス係数の検定を行ったが、有意な差は見られなかった。これらの分析の結果から、ソーシャルサポートの多さが孤独感の低減に大きく影響することが明らかになった。また、下宿生よりも自宅生のほうが道具的依存欲求が高いことが示唆され、欲求をむける対象及びサポート者といった要因の検討を今後の研究課題とした。

---

## 視点取得と誇大性自己愛傾向が攻撃的ユーモアスタイルと自尊感情の関係に及ぼす影響

武蒼 一郎

ユーモアにも精神的健康に有益な影響を及ぼす使い方と有害な影響を及ぼす使い方があるが、特に攻撃的な形態を取る攻撃的ユーモアのみ、精神的健康の指標となる尺度との間の相関が示されていない。そこで、本研究では、攻撃的ユーモアと、精神的健康の指標の1つである自尊感情の間の関連を、認知的共感の1つである視点取得と自己愛傾向の1つである誇大性自己愛が調整するかどうかについて検討した。その結果、調整効果はみられなかったものの、追加で検討した評価過敏と誇大性自己愛の混合型の場合において、有意ではないが攻撃的ユーモアスタイルと自尊感情の間に負の傾きがみられた。ここから、誇大的で過敏的な自己愛傾向の場合には攻撃的ユーモアスタイルは自尊感情に有害である可能性が示唆され、その点において、攻撃的ユーモアと自尊感情の間の関係を検討する際の知見をもたらすことができたと考えられる。

---

## 大学生におけるアタッチメントネットワークとアタッチメントスタイル、自尊感情および適応感の関連

醍醐 佐代子

本研究では、大学生のアタッチメント・ネットワークの構成を明らかにすることを目的とし、どのような構成員が各アタッチメント機能をどれだけ担っているのかを検討する研究1と、アタッチメント・ネットワークを構成しうる全ての人との関わりが、心身の健康を促し、社会適応への支援となる可能性を探ることを目的とし、アタッチメント・ネットワークの質（構成員数、親と友人・恋人が担う愛着機能の程度）が個人に及ぼす影響（ECR-GO尺度、自尊感情尺度、適応感尺度）について検討する研究2を行った。研究1では、各構成員について愛着機能尺度に回答を求め、母親と恋人が全ての機能を満遍なく高く担っていると示された。研究2では、各従属変数と構成員数との関連はあまり示されなかったが、親が担う愛着機能得点は大きく影響することが示された。考察では、大学生のアタッチメント・ネットワークが果たす役割やそれに関連した支援について述べた。

## 育児場面における原因帰属および評価懸念と被援助志向性の関連の検討

箱 井 遥 名

育児場面において親は子育てに関する様々な悩みや問題を経験するが、親の援助要請は必ずしも多くはない。本研究では、援助者に援助を求めるとどうかについての認知的な枠組みである「被援助志向性」に着目し、さらに被援助志向性に関係していると考えられる変数として「原因帰属」と「評価懸念」を取り上げ、育児場面におけるこれらの関連を検討することを目的とした。大学生10名と乳幼児の母親4名に対して予備調査を実施し、本調査で用いる育児場面の選定と原因帰属の項目の設定を行った。本調査は、大学生104名を対象に場面設定法を用いた質問紙調査を行った。変数間の相関係数を算出した結果、育児場面において子どもの行動を自分（親）に帰属させることと援助を求めることへの懸念や抵抗感の低さには負の関連があること、また同じく子どもの行動を自分（親）に帰属させることと評価懸念の高さとの間には正の関連があることが明らかになった。

---

## 大学生の両親との関係性及び自らが受けた養育経験が親性準備性との関連について

樋江井 悠 真

本研究の目的は、両親との現在の関係性と親から受けた養育経験が親性準備性にどのように関連するかについて調べることであった。そこで、両親への態度と育児に関する両親への同一視との関係性を確認し、両親への同一視と養育経験の認知が親性準備性にどのように関連するか検討した。両親への態度、両親への同一視、被養育認知、親性準備性、子どもとの接触経験、性の受容からなる質問紙が大学生148名（男性75名、女性72名、その他1名）に実施された。結果、両親との関係性が良好であるほど、育児について両親の同一視を生じやすく、両親への同一視が高いほど、親性準備性も高くなる傾向が見られた。また、男女毎の分析の結果においては、男女ともに母親に比べ、父親の方が関係性と同一視との関連が大きく、親性準備性への影響も父親への同一視がより大きな関連を示した。親性準備性には、両親への同一視、特に父親への同一視が関連していることが示唆された。

---

## ストレスフルな体験後の意味づけ過程における同化・調節作用の検討

松 本 遼 香

近年ストレスを感じる要因は多様化しているが、同じ出来事に対する感じ方は個人差がある。私たちはストレスを感じるような体験、つまりストレスフルな体験をするとその出来事に対して意味づけを行う。その過程では、ストレスフルな体験を自然と自分の中に受け入れる同化と、ストレスフルな体験を受け入れるために自分の価値観を変化させるなどの対処をする調節が働いている。本研究では体験からの経過時間と個人の自己効力感が同化・調節に及ぼす影響を検討した。結果、体験直後は同化・調節ともに働きが強く、時間がたつと弱くなることがわかったが、体験からの経過時間の長さとの関連は見られなかった。また、体験直後は調節より同化が強く働くが、時間がたつとそれぞれの働きの差は見られなかった。そして、自己効力感が低いと同化・調節ともに強く働くことがわかった。今後、同化・調節にそれぞれ異なる影響を及ぼす要因について検討する必要がある。

## 高齢者の匂い刺激による未来事象の無意図的想起の特性

村山 絵梨奈

ある匂いを嗅ぐことでそれにまつわる記憶や感情が呼び起こされる心理現象をプルースト現象という。嗅覚刺激によって想起された記憶は他の五感刺激によって想起された記憶とは異なる特性を持つとされており、また高齢者と若年者でも記憶想起に異なる特性を持つ可能性が示唆されている。本研究では日誌法を用いて、匂い刺激による無意図的想起についての高齢者と大学生の比較検討を行った。その結果、高齢者と大学生で想起された記憶の数や内容、快不快度には有意差が見られなかったが、手がかりとなりやすい匂いに差があることや、高齢者、大学生ともに未来事象よりも過去の出来事が想起されやすいことが示された。これらの結果から、過去のエピソードなどを語ってもらうことで認知症高齢者への心理療法としても用いられる回想法において、嗅覚刺激の効果的な活用が期待できることが示唆された。

---

## 集団フォーマル性が部活動・サークル集団への適応感に与える影響

諸星 亜佳里

本研究は、大学生の部活動・サークルにおいて、リーダーの行動が成員の適応感に与える影響を、集団フォーマル性の違いから検討することを目的とする。部活動・サークルに所属経験のある大学生を対象に質問紙調査を実施し、フォーマル性の高さによるリーダーの行動の違い、リーダーの行動と成員の集団に対する態度の相関、入部理由とフォーマル性の関連を分析した。

結果、リーダーシップ行動のうち技術指導は、フォーマル性高群＝中群＞低群、圧力はフォーマル性高群＞中群＞低群の順で、リーダーがとりやすい傾向にあった。また、中群ではリーダーの技術指導・人間関係調整・統率により成員の態度が肯定的になり、低群ではリーダーの技術指導・人間関係調整により成員の態度が肯定的になった。つまり、集団フォーマル性の高さによってリーダーの行動は変わり、フォーマル性が低くなるにつれて集団を管理し統制する行動はリーダーに要求されないと考えられた。

---

## 大学生の課外活動集団における先輩の対後輩行動が、後輩の主体性に及ぼす影響

八嶋 ふみ

本研究は、大学生の主体性へ影響する要因として、課外活動集団における先輩の後輩に対する行動（対後輩行動）に着目した。

新井・松井（2004）を参考に作成した後輩視点の対後輩行動尺度は、因子分析の結果、「親交」、「攻撃・権力行使」、「命令・注意」、「計画」、「遠慮」の5因子が見出された。また、新井・松井（2004）を参考に「配慮」、「指導」、「模範」の3因子を設定した。さらに、作成した課外活動メンタリング尺度のうち、「課外活動キャリア的機能」の項目を使用した。

分析の結果、先輩と後輩の1対1の関係における対後輩行動のうち、Kram（1988 渡辺・伊藤訳 2003）の指摘するメンタリング行動に類似する行動の一部は主体性に正の影響があり、メンタリング行動と逆と捉えられる行動は、主体性に負の影響があることが示唆された。また、対後輩行動の一部は心理的安全性にも影響し、さらに主体性と心理的安全性が課外活動満足感に正の影響を与えることが示唆された。

## 成功体験が大学生の自己愛に及ぼす影響

—自尊心と対人恐怖を媒介として—

安田 麻理亜

本研究は、自尊心と対人恐怖心性を媒介要因として、成功体験と大学生の自己愛との関連を検討することを目的とした。自己愛を誇大性自己愛と過敏性自己愛の2つに分けた上で、成功体験、自尊心、対人恐怖心性、誇大性自己愛、過敏性自己愛の関係をパス図にして検討を行った。パス解析の結果、成功体験が多いほど、自尊心を媒介として誇大性自己愛は強まることが示唆された。一方で、成功体験が多いほど、対人恐怖を媒介として過敏性自己愛は弱まることは支持されなかった。しかし、モデルの適合度が不十分であったことから、仮説時に立てたパスモデルが不適切であったことが推定されたため、パスモデルを再考し、パス解析を再度行った。結果、改めて成功体験が多いほど、自尊心を媒介として誇大性自己愛は強まることが示唆され、成功体験が多いほど、対人恐怖を媒介として過敏性自己愛は弱まることは支持されなかった。

---

## 侵入思考の自我異和性が逆説的効果の増強に及ぼす影響

山田 寿馬

侵入思考とは、意図せず生じる不快な雑念として理解される思考現象であり、その程度の悪化が様々な精神障害に繋がると考えられている。侵入思考の悪化プロセスには、思考抑制を試みるとかえって思考が活性化し増強してしまうという逆説的効果が存在するが、これまでの逆説的効果の研究では主に抑制の行い方に焦点が当てられ、侵入思考の内容や性質の影響はほとんど未検討であった。そこで本研究では、侵入思考の性質の中でも思考の悪化への寄与が示唆されている自我異和性に着目し、自我異和性の高い侵入思考を抑制すると、より逆説的効果が増強するという予測のもと検討を行った。参加者を思考抑制の有無×自我異和性の高低の4群に分け、各群で抑制/非抑制時の思考頻度を測定したところ、思考抑制による思考頻度の増加や自我異和性の高さによる逆説的効果の増強は見られなかった。最後に、こうした結果が得られた理由や今後の課題について考察を行った。

---

## 一般的イメージに基づいたHSP傾向と精神健康の関連

—自尊感情、ストレス、抑うつ・不安傾向に着目して—

吉川 怜那

本研究は、予備調査を通じて一般的イメージに基づいたHSP尺度を作成し、一般的イメージに基づいたHSP傾向と自尊感情、ストレス、抑うつ・不安傾向などの精神健康の関連について検討した。予備調査では、成人97名に調査を実施し、66名（男性24名、女性40名、その他2名； $M=21.80$ ,  $SD=1.33$ ）の回答を尺度作成に用いた。探索的因子分析を行い、17項目、4因子（気苦労、気配り、神経症傾向、生活での敏感さ）構造の一般的イメージに基づいたHSP尺度を作成した。本調査では、成人156名に調査を実施し、111名（男性39名、女性72名； $M=23.02$ ,  $SD=3.13$ ）を分析対象とした。相関分析の結果、HSPS-J19合計点と一般的イメージに基づくHSP尺度合計点は中程度の正の相関を示した。また、重回帰分析の結果、自尊感情には気配り、神経症傾向、生活での敏感さの3因子が、抑うつ、不安、ストレスには神経症傾向、生活での敏感さの2因子が関連を持つことが示された。



## 青年期における情動調整不全

—幼少期の非承認的環境が解離を介して、青年の情動調整不全に及ぼす影響—

佐野 なな子

青年期における情動調整不全は数々の精神病理との関連が報告されているものの、その維持メカニズムに関しては十分な検討がなされていない。本研究では、18歳から23歳までの63名を対象とし、非承認的環境下の母親の非承認的関わりの高さが青年の現在の解離の高さを介し、情動調整不全の高さに影響を及ぼす媒介モデルを検討した。さらに、媒介モデルにおける父親の非承認的関わり調整効果も検討した。媒介分析の結果、媒介モデルは支持されなかった。調整媒介分析においても、父親の非承認的関わり調整効果がみられず、仮説は支持されなかった。一方で、探索的検討の結果、情動調整不全や解離は父親の非承認的関わりと関連している可能性や、父親の非承認的関わりの高さが解離の高さを介して、情動調整不全の一側面である感情受容に対する困難さの高さを予測する可能性が示唆された。本論では、愛着や家庭外の他者との関わりの影響についても議論された。

---

## 男性役割ストレスが性的加害経験に及ぼす影響

丸田 梨乃

本研究では性暴力の発生に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的として、男性役割ストレス（以下、MGRSと言う）が性的加害経験に影響を及ぼしているかについて、先行研究で示されている敵対的な男性性、非人間的性交とともに検討した。一般成人男性18歳から39歳を対象に、Web上での質問紙調査を行った。分析対象158名のデータをもとにロジスティック回帰分析をおこなったところ、先行研究における非人間的性交に該当する性に対する態度の「性的寛容さ」のみが性的加害経験に有意な影響を及ぼしていた。一方、MGRSと敵対的な男性性は性的加害経験に有意な影響を及ぼしていなかった。本研究では、「性的寛容さ」の調整オッズ比が1.92であり、性的加害経験には個人の性に対する考え方が最も影響している可能性が示唆された。

---

## 保育体験学習による親性準備性の発達

—時間的展望と保育体験学習に対する課題価値の認知に焦点を当てて—

若林 実来

少子化等の影響による青年期の親性の低下が危惧されるようになり、乳幼児とふれあう体験である保育体験学習が各自治体や学校等で実施されるようになってきている。一方で、保育体験学習の長期的な効果について十分な検討がされていない。本研究では、大学生を対象として保育体験学習の経験の有無、保育体験学習参加時の保育体験学習に対する興味価値・実践的利用価値の認知、青年期の時間的展望と、親性準備性との関連について明らかにすることを目的とした。大学生、専門学生112名から有効回答を得た。本研究の目的を検討するために、相関分析と重回帰分析を行ったところ、保育体験学習参加時の興味価値の認知が高いほど青年期の親性準備性が高いという結果が得られた。本研究より、ただ保育体験学習を実施し生徒に参加させるだけでなく、生徒が興味を持って保育体験学習に取り組めるような工夫が必要であることが示唆された。